

アメリカ文学に於けるピューリタニズム小論

The Essay about Puritanism in American Literature

大 森 孝

一、ニューイングランドの清教徒

アメリカに文学が生れ出るとすれば、それは頻繁な移転に依って中断され或は破壊される恐れのない一定の文化を持ち比較的に落着いた東部の社会に於いてでなければならぬ。ニューイングランドの生活は陰鬱であっても自己内省や聖書の熟読や、教会の聴法等が精神の緊張と鍛錬をうながし、文学を生む下地は濃厚であった。そしてそれは信仰上の論文や日記や、本国への通信等の形を取って事実上東部にあらわれたのであった。そして当時の社会が一般に清教のセオクラシー (theocracy) に依って支配されて居たと同様に文学に於いても、清教的イデオロギーは絶対の支配権を持って居たと云える。否今日に於いてすらアメリカ文学はピューリタニズムの圧力の下に有ると云えるかも知れない。この意味に於てピューリタニズムの伝統は、アメリカ文学に於いて最も重要な一項目と云えるのである。

メイフラワ号に乗って北部 Plymouth に渡来した移民は、主として小農夫職工等からなり大して学問も教養もな

く彼等のあとから陸続と渡航した清教徒（イギリス中産階級の郷土であり又学者達）と区別されるけれども、実際に於いては前者は間もなく後者に包容同化されて両者の区別は困難となったのである。こうして成立したニューイングランドの植民地は最初に植民として渡来した南方ヴァージニアに於ける英国王党即ちカヴァリア達の作った植民地と相對して本国に於ける二つの思想的潮流を反映したと考えられている。しかし事實は必ずしもそうでなく、清教徒は優越な精神的政治勢力を振ってアメリカ全土に君臨したのである。

アメリカに移住した清教徒の宗教觀は甚だカルヴィニスム（Calvinism）に近似して居た、カルヴィニスムの信仰は新英州の自然と一脈相通じて居り、清教徒はこの信仰と自然と二方面から影響されたのである。

註 ② John C. Calvin (1505-64) の唱道した神中心の厳格な主義。

自由意志の否定、選民的思想、プリデイスチネーション（Predestination）の信仰（極悪の性質をもつ個人の靈魂を救うことも神には何の約束も責任もなく、ただ自分の選ぶものを救えばよいと云う信仰）これ等はカルヴィニズムに於けると同様にピューリタニズムを形成する主要の觀念であり、現世に対する輕蔑、外界事物に対する無關心、肉体的快樂への反感、バイブルの絶対尊重等ピューリタンの特色となって現われるのである。この様な強烈な信条の実行はその緊張と人間性の圧迫によって陰鬱な空氣をかもしながらも、植民地の困難な事業が結束と独裁的政治を必要とする理由もあって、特殊な社会形態を形成しながら長年月維持されたのである。

彼等が移住して来た動機は經濟的政治的な種々事情も有ったに違いないが最大のものは信仰の自由に対する憧憬にあったと思う。清教徒にとっては日常生活に於ても宗教的もしくは道徳的意義の發見されない様な事は全く興味がな

い如くであり、自然の壮大さや美しさ等の叙情詩的情感も説教の一節に過ぎなかつたのである。要するに清教徒は狂信者の団体であり、信仰と日常生活に於けるクリスト教的理想の追求が清教徒の最大の関心であり、宗教的神聖さを表わし、或は道徳的教訓を含むものでなければ美とは映じなかつたのである。

こうした考え方は清教徒のヤオクラシー (theocracy) がアメリカを支配して居た十七、八世紀を通じてアメリカ文芸を束縛したのみならず、セオクラシーが滅亡し、清教的信仰が消えたと思われる十九世紀に於いても尚アメリカ文学の上に重圧を加えていたのである、宗教と道徳に縛られた文学、それは彼等がアメリカ文学の上に残した、最大の又最悪のものであつたかも知れない。反面彼等は将来のアメリカ文学に対し幾多の貢献もして居るのである。ピューリタンの傾向は文学の上に強い影響をなして居るが、最大の貢献は教育の尊重と云う事であろう。新英州の社会では学者、神学者は教会内に於けると同様に、それ以外でも絶大の権力を有する支配階級だつた、彼等は聖書を以って神の意志の決定的な表われと見なして居た為、聖書によって自己の扱いを図る必要があり、その為聖書を読み解釈する力を持つことは絶対に必要であつた。それ故植民の初めから学校教育を強制したのである。要するに清教徒の社会は学者の支配する社会であり、彼等が残した伝統の中には、書物と学問に対する尊敬と云うことが強く出て居るのである。

或程度の学問的背景が文学の出現に対して必要であるとすれば、教育は文学の発生と成長とに対する最大の要因であると云えよう。ピューリタニズムはこの意味でアメリカ文学の成長に重大の関係があると思うのである。

清教徒の文体について一言するならば聖書に親んだ結果素朴と威厳とを特色となしたのであり、平易で端的な用語法、それは彼等がアメリカ文学の上に残して行つた遺産の一つと云えよう。

二、清教徒に於ける文学の萌芽

右の様な思想を背景として宗教的・道徳的な一種の文学が十七世紀清教徒の間から萌芽した。彼等は文学を職業としたものでは勿論なかったが、彼等の書き残した日記や歴史、旅行記等は彼等が生活の反映として、吾々に取って一つの懐古的な興味があるばかりでなく、アメリカ文学に於ける一指導精神の具現として歴史的重要性を持つのである。

最初に印刷された書物即ちアメリカで印刷された最初の書物は *The Bay Psalm Book* であつた。これは旧約の詩篇を韻律化しようと企図したものである。植民時代に於ける有名な詩人としては、ブラッドストリート (*Anne Bradstreet*) とウィルズワース (*Michael, Wigglesworth*) 等がある。*Anne Bradstreet* (1612—72) は父がマサチューセッツの知事であつたし、夫も又知事であつた。彼女の作品の主なるものには *"The four monarchies"* 等の長詩も有るが、彼女の最もよき要素は後期の短詩 *"The Fresh and the sprit," "Contemplations"* の如きであり、そこには気どらない精神的態度が純真な自然の描写と結合して詩の効果を示して居り、流麗正確な旋律に表現し得る能力の有る事を示して居る。唯彼女は自然の中に宗教的意義を発見しようと試みて居り、こゝに彼女の清教的特質を見るのである。

Michael Wigglesworth (1631—1705) はイギリスに生れ、ハーバードを卒業しすぐ牧師となり死に至る迄五十年間つとめ、傍ら医師として奉仕したのである。彼の長詩 *"The Day of Doom"* は千五百行の叙事詩であるが、これは「最後の審判」を俗謡風の韻律で述べたものであり、そこには死人の群れが善悪二つに別れて神前で戦う光景や凄惨な最後の審判の写實的描写がある。この書は幾度も版を重ねてカルヴィニズムの勢力の消滅する迄愛読者を失う

ことがなかった。

Edward Taylor (1645—1729) はニューリタンの詩人たちの間で一人だけ例外的に詩人として十分な賞讃を受けて居る、彼はイギリスに生れ 1668年 ボストンに渡来し、ハーバードを卒業したのち、マサチューセッツの辺境の村で牧師兼医師として住みつき一生を終った。彼は庶民の生活からとった現実的な image と用語によって、高遠な信仰を印象強く歌おうと努め Puritan の規格を破った当時の詩としては変わったものであった。

初期清教徒の書き残したものにはこうした詩の外に日記と歴史がある。例えば知事のブラッドフォード (William Bradford 1589—1657) の History of Plymouth Plantation は英国宗教改革に於ける国教分離派運動以後一六四六年迄の植民史であり、知事ウインスロップ (John Winthrop 1588—1649) の日記は一六三〇年から四九年に至る新英州の公私生活や宗教行事の記録である。

ウオード (Nathaniel Ward 1578—1652) は一六三〇年アメリカに渡航して牧師となり後英国に帰ったのであるが “The simple Cobbler of Aggawam” に於て、英米両国を一足の古靴に見立て、自分の使命をその修繕融和にあると感じたのである。彼は一切の変化を否定し、祖先の旧慣に反する事は凡て罪悪であると見做している。清教文学はかくの如く濃厚なる宗教的特色を以って展開し、後にコットン、メイザーと云う代表的作家により大成され、やがて消滅したのであるが、彼を説く前に清教作家と明白な対照をなす、南方ヴァージニアに関係ある二人の作家ジョン・スミスとウイリアム・バードに言及しようと思う。

ジョン・スミス (John Smith 1580—1631) はアメリカ人でも清教徒でもなかった。彼は南方に渡航したカヴァリアーの一人であり英国の国王と宗教に忠実な一冒険者であった。彼の書き残した数巻の記録は、空想的な虚偽が勝

って居るといふ批評はありながら、その絵画的で興味深い書き振りで人気をばくしたのである。彼の著作“*A True Relation of Virginia*”は彼の一党がチェイムズタウンの植民地を創設してから十三ヶ月にわたる新大陸の生活記録であり、又植民地の前途に対する楽観的な觀察記でもあった。又“*The General History of Virginia, New England and Summer Isles*” (1624) に於ては彼が南部奥地でインディアンの酋長に捕えられ斬首されようとする時、酋長の娘ポカホントスに救われたと云う物語りであり、これは架空の話だと言われるが史談や小説にしばしば語られる話である。

バード (William Byrd 1675—1744) は半世紀以上もスミスに後れ、一定の社会形態が出来上った後に南方の地主階級に生れたのである。彼はヴァージニアと北カロライナの境界設定のための測量団に加わり、この体験を“*The History of the Dividing Line* (1841年空刊)”と題する日誌に書き残した。彼はカヴァリーアであったから清教徒の様に宗教と道徳にとらわれなかった。それ故の中で山間地方の自然や野人の生活を機智とユーモアを持つ文体で生々と描写して居る。植民地の明るく愉快な側面は彼に於て最初の表現を見出した。その意味で彼は将来のアメリカ文学に対して一つの指針であったと云えようか。

三、コットンメイザー。シユオール。エドワーズ。

清教文学の大成者はコットン、メイザー (Cotton Mather 1683—1728) であった。彼の祖父リチャードは一六三五年アメリカに上陸し、ボストンに逃れて来たのであるが、その学問と権勢慾によって、間もなく重要な存在となった。その子インクリース (Increase Mather) は神権政治の真最中にマサチューセッツの教会で六十年間聖壇に立

ち且つハーヴァードの総長を十六七年間勤め又植民地代表として本国政府と折衝し、巨大な保守的勢力として一世を
庄したのである。

其の子コットンは祖父や父以上の偉才と云われ四百五十冊を越える著書を宗教哲学、歴史科学等にわたって書いた
父と同じくポストンの北教会の牧師たること四十年を越え、学者としても頭角を顕わして居たのである。しかし彼の
知性は非常に狭くかたより人間的な感情のうるおいをもたず、自己と他人の生活を一樣に律しようとした。その間に
時勢の自然の変化によって、ニューイングランドの牧師社会が變つて行くのに気づかなかつた。こうした点から失敗
を経験するにつれ、次第に反動的態度を増して行つた。彼の代表的著作“*Magnalia Christi Americana, The
Ecclesiastical History of New England (1702)*”に於て聖職者の生涯等を語ると同時に、新世界に於ける神意の
勝利をたゞえようとして居る。今一つ有名な書物は“*The Wonders of the Invisible World (1692)*”であるが、
そこには悪魔の實在が説明され、いわゆるウィッチクラフト（妖術）の例が記録されている。

次にシュエール（*Samuel Sewall 1652—1730*）は市民として注意すべき存在であり、メーザー一家全盛のポス
トンにあって、その商才と結婚により当時第一の富者となつた。彼の書きのこした日記は当時のポストンの現実生活
の記録として興味深いものであり、又“*The Selling of Joseph*”と題する小論文により奴隸解放の先覚者たる名誉
を担っている。又一六九三年妖術を行つたという理由で告発された人々を裁くため、裁判官として被告十九人を絞首
刑に処した所謂セイレム妖魔事件に関与したことに責任を感じ、公に贖罪を行つた道德的勇氣と誠実な人格は推奨さ
れてよいと思う。

‘*エドワーズ (Jonathan Edwards 1703—1758)*’はニューイングランドの精神の最高峰とも云うべきで、熱烈な神

の使徒である。Connecticut州に生れ、エール大学に学んだ後一七二九年正牧師となった。しかし余りに厳格な態度は教会幹部の反感を買ひ一七五〇年に教会を追われ、失意と窮乏の中に布教師となって印甸の部落に入った。そしてその間の著述として有名な“*Treaties on the Freedom of the Will* (1754)”が有る。この書はヨーロッパの思想界にも影響を及ぼしたのである。後プリンストン大学総長に選任されたが間もなく天然痘にかゝり死んだ。

エドワーズは非常に早熟な天才であり初から神秘的な感受の力と明徹な論理の力を示して居た。彼は自然や人性の美しさを純粹に感じることが出来るとともに、それらを支配する神の存在に対し明瞭な直覚をもつのであった。彼が幼時からもった神秘的体験、神に溶け入る忘我の喜びは彼の手記に書き留められているが、然も彼は生来の緻密な論理力をもって、神の世界を厳しく明瞭に把握しようとしカルヴィニズムの極点とも云うべき絶対な不寛容に迄入って行ったのである。それは当時のアメリカ精神界の最大な代表として、フランクリンの世俗的智恵 (Yankeism) の代表者なる位置に対立するのである。エドワーズは従来のカルヴィニズムに生命の愛と神秘的直観を加えたものであり、このミスチズムの流れはエマーソン (Emerson) ホイットマン (Whitman) によって受けつがれるのであるが、更に彼の悲劇的思想はホーゾン (Hawthorne) メルヴィル (Melville) に伝っていると云えるのである。エドワーズを最後の光としてセオクラティックな清教の時代は次の革命時代、啓蒙時代に推移するのである。民族と社会の成長に伴って独自の成長をなして現在に及ぶアメリカ文学に於て、ピューリタニズムが如何なる役割を果して来たかについて筆者なりに概説した次第である。

以上

- Calverton, V. F.: *The Liberation of American Literature*, New York, 1932.
- Foerster, Norman: *American Criticism*, Boston, 1928.
- Menken, H. L.: *A Book of Pre'ace*, New York, 1924.
- Gen, Sakuma: *The study of American Novel*, Kenkyusha, Tokyo, 1934.